

海外ボランティア体験学習プログラムについて

【はじめに】

昨年度実施した「海外ボランティアプログラム」を今年度は「海外ボランティア体験学習プログラム（以下 MOP）」と名称を改め、前年度に比べてサービス・ラーニングの要素をより具体的に取り入れた。サービス・ラーニングとはアメリカで 1990 年代より小学校から大学に至る様々な教育現場で導入されている教育手法であり、事前にプログラム内容（事前学習・準備、ボランティア活動、報告会実施、報告書作成等）を計画して実施する。また、サービスの内容は地域社会のニーズに応えるものであることも重要であり、そこでの経験の振り返りを通して学習を行う。今年度の MOP では本学の学生を海外 2 カ国の大学へ派遣し（派遣プログラム）、海外 1 カ国の大学より学生を受け入れた（受け入れプログラム）。また来日する外国人学生と共にプログラムに参加する「ボラ活パティ」は本学の学生より募った。本プログラムは、社会の抱える様々な課題について、国境や文化的背景を越えて、学生たちがボランティアという立場で共に体験しながら自身の手で学びを創造する機会を提供し、支援することを目的とした。プログラムのねらいや大まかな流れは MOP として統一したが、現地プログラムは 3 コース設定されており、事前学習や準備は現地プログラム内容を前提に計画しているため、履修する内容と参加費用、活動場所は参加者によって異なる（表 1）。学生たちは現地プログラム終了後、準備を経て白金校舎で報告会を実施した。司会は前年度 MOP 派遣プログラム参加学生が担当し、約 30 名の来場者があった。本学の学生や教職員のみならず、他大学の教員や近隣地域の方々も来場して下さった。学生たちが話し合いを重ねた結果、「アメリカ派遣学生発表（個人発表）」、「イギリス派遣学生発表（グループ発表）」、「受け入れプログラム学生発表（ボラ活学生、グループ発表）」と発表は現地プログラム別に行った。白金校舎での報告会后、学生たちは自主的に横浜校舎でも報告会を企画した。横浜校舎の報告会では在籍生が参加学生と同じ 1、2 年生が多く、昼休みを利用して実施したことから来場者が多かった。また、受け入れプログラムでお世話になった社会福祉法人開く会のスタッフの方々もご来場くださった。来場者アンケートには「楽しんで活動している姿が印象的でした。思っていた以上にボランティアは身近にあるものだと思います」との意見が多くあった。報告会終了後は集大成として報告書を執筆し、その完成をもってプログラムは終了した（報告会・報告書の詳細は、ボランティアセンター発行「2007 年度海外ボランティア体験学習プログラム報告書」を参照）。以下では、プログラムが学生たちに与えたインパクトについて報告する。

1. 派遣プログラムについて（表 1 参照）

募集にあたって説明会を実施し、応募受付、書類選考、面接を経て 5 名の学生を決定した。今年度は全員が女子学生であり、内訳は 1 年生 1 名、2 年生 3 名、3 年生 1 名である。プログラム最終アンケー

トから参加学生の満足度を調べたところ、回答した4名全員が「とても満足」と答えた。理由には「ただ楽しいだけではなく様々な経験をする機会や大変な面もあったからこそ成長することができたから」、「人と関わることの楽しさを改めて実感した」、「自分自身を見直すきっかけになった」などの記入があった。プログラムを通して一番よかった内容はやはり海外でのボランティア活動が多かったが、中には「報告会」を挙げる学生もいた。一方で「事前ボランティアの内容を具体的に指示するべき」といった意見もあった。学生自身の変化と成長を表す「プログラムが自身に与えた影響」という質問項目では、「職業観」0、「人生観」2、「学業」2、「社会観」2、「コミュニケーション力」1、「その他」0という結果だった（複数回答）。「プログラム参加前と終了後の自分を一言で表すと何ですか?」という質問には「過去に戻りたい気持ちから本当に大学生(未来)になった」、「不安から希望へ」という回答があった。また、「プログラム参加前と終了後のボランティア観を一言で表すと何ですか?」という質問には、「自分がしてあげるものから楽しむものへ」、「偽善から小さな思いやりへ」、「見返りを考えずに人を助けてあげるものから笑顔へ」といった回答が寄せられた。

2. 受け入れプログラムについて（表1参照）

今回、イギリス・レスター大学から1名の学生が来日し、初めての受け入れプログラムが実現した。彼女と共にプログラムに参加したボラ活バディの参加者は最終的に7名であり、全員女子であった。内訳は1年生5名、2年生1名、3年生1名である。募集にあたって説明会を実施し、応募受付、書類選考、面接を経て参加者を決定した。プログラム最終アンケートから学生の満足度を調べたところ、回答者6名中5名が「とても満足」、1名が「満足」と答えた。理由には「自分に成長や変化があったから」、「多くの出会いがあったから」、「楽しかったから」、「新しい世界を知ったから」などの記入があった。その他、「留学生と寝食を共にできていい経験だった」、「有意義な夏休みになった」、「何気ない日常を意識するようになった」、「あっという間だった」、「来年もぜひ実施してほしい」などの回答があった。一方で「留学生の人数が少ない」、「ボラ活バディ同士のコミュニケーションが難しかった」、「現地スケジュールがきつかった」、「プログラムの存在を学内の職員が知らず宿泊中困ったことがあった」という意見もあった。学生自身の変化と成長を表す「プログラムが自身に与えた影響」という質問項目では、「職業観」0、「人生観」3、「学業」1、「社会観」3、「コミュニケーション力」2、「その他」0という結果だった（複数回答）。「プログラム参加前と終了後の自分を一言で表すと何ですか?」という質問には「積極的になった」、「一歩踏み出すことが楽しくなった」、「見て見ぬふりをしなくなった」といった回答があった。また、「プログラム参加前と終了後のボランティア観を一言で表すと何ですか?」という質問には、「一方通行なものから相互性のあるものへ」、「特別なものから日常生活の動作の一つへ」、「貢献するものからリラックスするものへ」、「単発的なものからつながっていくものへ」などの回答が寄せられた。

【まとめ】

全体的に参加学生たちはプログラムに満足し、多くの学びを得ていた。また、海外に行くのではなく外国人学生を日本に招き寝食と共にするという形も高く評価していた。そして前後の変化ではネガティブからポジティブへ、一方通行的思考から相互的思考へ移行していることが明らかとなった。高い満足度の因子としては①参加動機の達成、②期待していた内容の達成、③予想外に「よかった」内容の出現と達成があると考えられる。そして他者への貢献よりも自己実現に重きが置かれていることが示唆された。学生の満足度が高いことは喜ばしいが、「不満」因子から見てきたのは「予定外・予想外な内容の出現」だった。与えられることに慣れている学生たちは自発性やオリジナリティが求められるなど、「想定外の出来事」に関しては「不満」としか処理できない傾向が伺えた。しかしサービス・ラーニング型プログラムは学外がメインフィールドであり、様々な人々とのコミュニケーションも必要な点から通常の授業とは異なり突発的な状況も発生する確率も高い。リスクマネジメント以外の点で、学生たちが自発性とオリジナリティを発揮できるプログラムの仕掛けをいかに創っていけるかが今後の課題の一つだろう。

プログラム別でみると、派遣プログラムでは昨年に続き学生の満足度が非常に安定している。特にアメリカのホープカレッジは同じキリスト教を教育理念の礎とする大学で、校風や学生の気質など雰囲気も本学と非常に似ていること、ボランティア活動にも活発に取り組んでいることから、今後更なる協働によって学習的プログラムとしての質を向上できる可能性が十分ある。受け入れプログラムは今回初めて実現できたが、学生の満足度や「学び」が海外派遣学生とほぼ同様に得られていること、費用対効果の点からも今後も継続の方向で検討する価値は十分あるだろう。一方、派遣プログラム、受け入れプログラムの両方において男子の応募が少なく、学生への周知も十分行き届いていなかったことから、参加者の獲得に非常に苦しんだ。何より、プログラムが企画された時点では長期的な視点と教育機関が主催するプログラムとしてのコンテンツと根幹が欠落していたため、実施の過程でパートナーである協定校との認識のズレも明かになった。特に受け入れプログラムでは外国人学生はもっと専門的でアカデミックな内容を想定している可能性が高いことが分かった。今回の外国人学生も大学院生だったが、実際一緒に参加する本学の学生たちは主に学部1、2年生だったことから学生間に差が生じる可能性があった。何より先進国から日本にわざわざ短期プログラムのために来日する学生の需要が少ないので、受け入れ学生の確保が非常に難しいという現実問題がある。このことから今後は本学に在籍している正規留学生も視野に入れて、改めてプログラムの構造を見直す必要がある。来年度はこれらの課題を鑑みて継続性と明確な位置づけを前提としてプログラム全体の見直しと協定大学との具体的な協議が必要である。

表1. 海外ボランティアプログラム (MOP) 2007 の概要

	海外派遣学生	受け入れ学生	ボラ活バディ
参加人数	アメリカ派遣：1名、 イギリス派遣：4名	イギリス レスター大学生1名	7名

プログラムの流れ	<p>説明会：5/21、5/22</p> <p>第1回オリエン：6/23</p> <p>第2回オリエン：7/28</p> <p>派遣期間：8月~9月（3週間）</p> <p>帰国後ミーティング：9/26</p> <p>個別カウンセリング</p> <p>報告会準備期間（予行練習、広報活動、作成など）</p> <p>報告発表会：11/22</p> <p>報告書提出：11/30</p> <p>最終総括：12/6</p>		<p>説明会：6/4、5</p> <p>第1回オリエン：6/23</p> <p>第2回オリエン：7/28</p> <p>現地プログラム期間：9月（2週間）</p> <p>プログラム終了後ミーティング：9/21</p> <p>個別カウンセリング</p> <p>報告会準備期間（予行練習、広報活動、作成など）</p> <p>報告発表会：11/22</p> <p>報告書提出：11/30</p> <p>最終総括：12/7</p>
事前プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ・英語自己紹介 ・事前ボランティア&レポート作成 ・文献購読とレポート作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人学生と出し物の企画と準備 ・自身のボランティア活動についてのプレゼンテーション準備（ボランティア先で発表） 	<ul style="list-style-type: none"> ・英語自己紹介 ・事前ボランティア（派遣先） ・ボランティア先の英文資料作成 ・外国人学生との出し物の企画と準備 ・日本語レッスンの企画と準備 ・キャンパスツアーの企画と準備 ・浴衣体験会の企画と準備
現地プログラム	<p>アメリカ：スープキッチンや児童施設、フェアトレード店でのボランティア活動、大学のボランティアイベント参加や授業参加やティーチングアシスタント。滞在は大学寮、教員宅ホームステイ。</p> <p>イギリス：環境団体(畑作業)、盲目者支援団体、チャリティーブックショップ、高齢者日帰り旅行でのボランティアや市教育長との対談など。滞在は大学寮。</p>	<p>ボラ活学生たちが準備したキャンパスツアーや浴衣教室、日本語教室、高齢者施設で発表する日英学生合作レクリエーションの準備、街のクリーン活動（NPO green bird）、高齢者施設訪問と交流（福祉プラザさくら川）、国際協力 NGO 事務所での手伝い（NPO 法人地球市民 ACT かながわ）、地域の高齢者・障がい児の相手や知的障がい者授産施設でのボランティア（社会福祉法人開く会）、田んぼの除草作業と各種自然体験（ふうき自然塾）、その他歌舞伎見物や東京・横浜フィールドトリップなど。</p> <p>※本学横浜校舎内の施設にて共同生活。</p>	
事後プログラム	<p>報告会実施（ボランティアセンター企画1回、学生企画1回）</p> <p>報告書作成</p> <p>最終総括(グループディスカッション)</p>	報告書提出	<p>報告会実施（ボランティアセンター企画1回、学生企画1回）</p> <p>報告書作成</p> <p>最終総括（グループディスカッション）</p>

(李)